

中東の宗教：アラブ調査室

「中東の宗教」全6回、

第1回 4月22日 オンライン配信 (15:00~17:00)

総論、中東地域の独自性と宗教地図

(担当：塩尻和子、アラブ調査室長、筑波大学名誉教授)

1、中東地域の概要：最古の文明の発祥地

「中東地域」について、「アラブ地域」、「イスラーム地域」、「紛争多発地域」などという近現代の固定観念だけでなく、俯瞰的に「中東」という地域の特色を学び、中東の全体像を改めて考える契機とする。

中東地域は、人類の文明史上、最古とされる都市文明、メソポタミア文明が発生した場所である。ティグリス・ユーフラテス両河流域に前3400年頃、都市文明が成立した。この地域はエジプトと並んでオリエント文明の中心地域となる。この地域にはアッカドやシュメールと呼ばれる土地にセム語系、インド・ヨーロッパ語系などの民族が興亡し、バビロニア、アッシリア、ペルシアなどの古代国家が成立した。

メソポタミア文明は、人類史上、最初の農耕や牧畜を開始し、青銅器を開発して武器や道具をつくり、楔形文字を用いて文書を残し、初期の宗教儀礼を制定し、ギリシア・ローマに受けつがれる六十進法や陰暦の暦なども発明した。その後、数千年にもわたってオリエント一帯に伝播することになる神話をも編み出した。

その後、この地域から後世にユダヤ教となる一神教の原型が発生し、その伝統に基づいてキリスト教、最後にイスラームが成立した。この地域が、今日の世界の主要な一神教の搖籃の地となったことは、重要な点である。

世界の文明の発展と展開について、必然的な役割を果たした筆記用具の発展についても、この地は極めて重要な貢献を行った。それは楔形文字の発明である。

紙が作られる前に、この地では楔形文字が用いられていた。楔形文字は、多くの場合、粘土書板に記されており、紀元前3100年頃の文書も残っている。パピルス紙や羊皮紙のように焼けたり腐敗したりすることのない粘土板に刻まれた楔形文字は、今日、ヨーロッパの博物館などに大量に保存されており、すべての解読にはまだ長い時間がかかるといわれる。

現在では、後進地域のように見なされるが、中東地域はこの人類史上最古の文明を作り上げた土地である。そのために、古代から受け継がれた多くの文化や宗教、伝統や風俗習慣などが、現在も地域のあちこちに残っている。つまり、メソポタミアで発生した各種の宗教的伝統とそれに付随する文化的伝統が今日の宗教を作り上げたのである。

繰り返しになるが、古今東西の宗教は、そのほとんどが多神崇拜であるが、ユダヤ教をはじめとして、世界三大一神教が発生したのもこのメソポタミア一帯、つまり中東地域である。したがって、中東の宗教を語ることは、世界の宗教と文化を語ることにつながる。

2. 今日の中東地域の諸問題

① 呼称：「中近東」「中東」「近東」

時代によっても定義はあいまいであるが、これらは近代になってヨーロッパからみた距離をもとに命名された地域名である。今日の中東は、西アジアと北アフリカからなる地域であるが、アフリカ、アジア、アメリカのように地理的名称がつかない。地理的状況としては、前述のように、ほぼ、メソポタミア文明と古代エジプト文明が発生した地域にあたる。近代では、オスマン帝国の領土のうち、17世紀の最大版図から最東のアゼルバイジャンと、最北のウクライナ、ハンガリーを除く広大な領域に相当する。

近代でも時代ごとに範囲も異なる。

第1次世界大戦まで「近東=旧オスマン帝国領」

「中東=イラン、アフガニスタン」

第2次世界大戦まで「中近東=旧オスマン帝国領、イラン、アフガニスタン」

第2次世界大戦以降「中東=アラブ地域（西アジア・北アフリカ）、トルコ、

イラン、アフガニスタン」

最近の傾向「中東・北アフリカ（MENA）」「拡大中東・北アフリカ（bMENA）」

② 使用言語（各種の方言を含む）

西アジアや北アフリカでは、アフロ・アジア語族セム語派に属する言語、アラビア語が話される。主にトルコで話される現代トルコ語はチュルク語族の一つである。チュルク語は、中央アジア一帯やモンゴル高原の西に存在するアルタイ山脈を中心に東ヨーロッパから北アジア（シベリア）に至る広大な地域で話されるが、言語間の差異は比較的小さく、チュルク諸語全体を「チュルク語」という言語、各地の言語を「チュルク語の方言」と見なすこともできる。

一方、イランを中心に話されるペルシア語は、インド・ヨーロッパ語族、インド・イラン語派、イラン語群に分類される。ペルシア語は古代ペルシア帝国から現在に至るまでイラン高原を中心に使われ続けてきた。現在のペルシア語にはアラビア語からの借用語が非常に多く、古代ペルシア語とはかなりの変容がある。イランのほかに中央アジアのタジキスタン、ウズベキスタン、コーカサス地方、アフガニスタン及びバハレーンやイラクの一部でも話される。イラン、タジキスタンでは公用語に、アフガニスタンでもパシュトーン人の間で公用語とされている。

従って中東地域の言語としては、概ね以下のように分類される。

アラビア語—西アジア、北アフリカ

トルコ語—トルコ、中央アジア、カフカース地方（チュルク語圏）

ペルシア語—イラン、アフガニスタン、タジキスタンなど

③ 中東の宗教と文化

現在では 90%以上の住民がイスラーム教徒、少数（10%以下）のキリスト教徒、ユダヤ教徒、その他が住む。イスラームを国教として認めている国も多い。文化的には、イスラームという基盤と、それぞれの地域の伝統文化が融合している。古代メソポタミアの宗教と古代エジプトの宗教の性質を残す多文化・多宗教地域である。

現代の中東と呼ばれる地域はアラブ系住民が多数を占めている国々（サウジアラビア、アラブ首長国連邦、イラク、シリア、レバノン、ヨルダン、エジプトなど）を主とし、若干の非アラブ国（アラブ系人種ではない多民族が居住している国）として、トルコ、イスラエル、イランを含む。

現在の宗教事情では、アラブ諸国の中ではイスラームを国教とし、住民の大半はイスラーム教徒である。ただしレバノンではキリスト教徒（主としてマロン派）が住民の約半数に達し、また全域にわたってコプト派教徒、シリア正教徒、ネストリウス派教徒、アルメニア派教徒、ギリシア正教徒、ローマ・カトリック教徒などのキリスト教徒が散在する。非アラブ国では、トルコが政教分離を行なったが、イスラーム教徒は依然として 90%以上と多く、イスラエルはユダヤ教徒が大多数を占め、イランにはイスラームの分派のシーア派教徒が多い。

ユダヤ教、キリスト教、イスラームといった同じセム系の伝統上に発生した一神教の出現以前は、この地域には多種多様な多神教が存在していた。ナイル河畔の古代エジプトでは太陽神崇拜や自然神、動物神の崇拜が行われ、多くの神話、祭式が一神教の登場まで続いた。

現代でも、ユダヤ教、キリスト教、イスラームのほかに、古来の伝統を守る少数の宗教集団の存在もある。これらのうち、重要なものを以下にあげる。

ハザル王国とは？

古代の宗教に起源を持つもの

ゾロアスター教

マニ教

マンダ教

ミトラ教

ヤズィード教

④ 現代の中東地域の成立

1922年 - エジプトがイギリスから王国として名目上独立。（実質的な独立は第二次世界大戦頃。その後、1952年にクーデタで王政が倒れた。）

1925年 - イランがイギリスから独立。パフレヴィー朝。
(1979年イスラーム革命で共和政に、イラン・イスラーム共和国)

1932年 - イラク王国がイギリスから独立。（1958年に革命によって共和制へ）

1932年 - サウジアラビア王国が成立。（オスマン帝国時代末期に半独立状態）

1943年 - レバノンがフランスから独立。

1946年 - シリアがフランスから独立。

1946年 - ヨルダンがイギリスから独立。

1948年 - イスラエルが独立。

1951年 - オマーンがイギリスから独立。

1951年 - リビアがイタリアから独立。イドリース朝。（1969年にカダフィら将校団による無血革命で王制が倒れた。）

1956年 - スーダンがエジプトおよびイギリスから独立。

1956年 - モロッコとチュニジアがフランスから独立。

1962年 - アルジェリア戦争を経て、アルジェリアがフランスから独立。

1967年 - 南イエメンがイギリスから独立（北イエメンはすでに1917年にオスマン帝国から独立、

1990年 - 南北イエメンが統一、イエメン共和国となる。

⑤ 近現代史の問題点： 植民地支配とアラブ・ナショナリズムから民衆蜂起まで

アラブ・ナショナリズムとは東アラブ地方に生れた、アラブの統一を求める思想と運動で、19世紀に知的および政治的な起源をもつが、基本的には20世紀に形成されたイデオロギーである。それはオスマン帝国の崩壊および西欧植民地主義列強の進出と結びついて形成された。1950年代後半にエジプトのナセルが主導権を握る政治運動として高揚し、60年代半ばまで中東地域の政治力学を規定する勢力となったが、1948年のイスラエルの建国と67年の第3次中東戦争でエジプトが敗北するに及んで、政治的にもイデオロギー的にも影響力を低下させた。

今日にいたるも、深刻なパレスチナ問題を軸にして、反政府運動は止むことはなく、アラブ・ナショナリズムは失敗したとみることもできる。そのなかで、アル・カイダやIS（「イスラーム国」）などの国際テロリストと呼ばれる戦闘的集団による破壊活動は止むことがない。2011年新年から北アフリカ諸国を中心に始まった民主的な政府を求める民衆蜂起が、ほとんどの国で失敗に帰した後も、強権的な国家支配に対する抵抗運動が続いて、社会情勢は安定していない。

資料「犬の川」(Dog River) の記念碑（世界記憶遺産）が教えること

レバノンの首都ベイルートの北方 18 キロにある「犬の川」はジェイタ鍾乳洞を水源として 31 キロ、地中海に流れ落ちる。この犬の川と呼ばれる小川の急峻な両岸に紀元前 1500 年から紀元後の 2000 年までの間、東西からやってきた時の国王や将軍たちが遠征軍を率いてこの川を渡った記念碑が刻まれてきた。現在のところ、石灰岩に刻まれた 20 基の石碑が残されていて、そのうち 17 基が今でも判読できる状態にある。

最も古いものはラメセス 2 世の石碑を含む 3 基の古代エジプトの石碑があり、最も新しいものは、2000 年に刻まれたレバノンからイスラエルが撤退した記念碑である。

この間に挟まれるように、新アッシャリアのエシャルハドン王や新バビロニアのネブカドネザル 2 世、ローマ帝国のカラカラ帝、イスラーム時代のマムルーク朝のスルタン・バルクーク、近代にはいるとナポレオン 3 世、第一次世界大戦の連合軍、1920 年のフランス軍、1946 年の第二次世界大戦の連合軍が撤退した記念碑がある。最も新しいものは 2000 年のイスラエル軍の撤退を記念する碑文である。

3500 年もの間、レバノン地域の周辺で軍事力を誇示した軍隊の多くが、凱旋記念にこの小川の急峻な川岸の石灰岩に 20 基を超える記念碑を残して行ったことは、不思議な現象である。これは現代の私たちに何を語ろうとしているのか。一般には、これらの記念碑はレバノンの歴史を記念するものだとされているが、ここにはレバノン一国だけの歴史を超えて、「中東」と呼ばれる地域に残された先人たちの生きた記録があるように思われる。



石碑の左側は新アッシャリア王国のエシャルハドン王（在位：681BC - 669BC）がエジプトのメンフィスを占領したことを示している。左側の尖がり帽の人物がアッシャリア王。右側にあるエジプトのラメセス 2 世（在位：1279BC - 1213 年 BC）の石碑にくっつけて造られている。犬の川で最も古い碑文のひとつである。